

この骨子の大事な部分だと思う。例えば、子どもの学習や活動の実態を子どもがいない県民にも共有する機会があって初めて自分事になるのではないか。

- アクション2のSTEAM教育やアントレプレナーシップを現場の教員だけで進めるのは大変だろう。地域、企業との連携が不可欠であるが、教員をフォローアップできるよう、外部との連携も行うコーディネーターに係るしくみづくりを行う必要がある。
- アートの分野では、これまでの受け身の鑑賞ではなく、1つの作品について感じたり考えたことを語り合い考えの多様さや違いに気づくという対話型の鑑賞が増えてきている。日常の学校の中で芸術文化活動に主体的に関わることができる、アクション3、⑦の主体性に関わって、お互いの考え方の多様さや違いに気づいていくようになるのではないか。
- 骨子にある全てをまんべんなく行うという考え方ではなく、自分たちの地域や学校の実情に応じて、重点的に進めていくことを決め、特色ある取組みがなされるようになると、魅力的な教育になるのではないか。

【佐藤委員】

- 目標に記載されている「評価する」について、「認める」という文言に代えた方が、個性を肯定的に評価するという意味合いが伝わるのではないか。
- 「県民の皆様へのメッセージ」の「保護者、家庭の皆様へ」に、「子どもが自分で遊び育つ力」という表現があるが、どちらかという幼児教育を念頭に置いた表現になっていると感じる。
- 方針3のアクション7で、「余白」とは、単純に時間的なゆとりのことなのか、それを越えて先生方のスキルアップを図っていくということなのか整理する必要がある。
- アクション8に「家庭教育の充実」とあるが、主体が家庭にあるという意味合いに感じるので、文部科学省に揃えて「家庭教育支援の充実」とした方がよいのではないか。
- 骨子の中身については、これまでの7カフェや検討委員会で議論してきたことが盛り込まれており、とても良い。

【澤邊委員】

- これまでの議論や政府の教育振興基本計画を踏まえた骨子となっていると思う。骨子にはたくさんの想いが込められている。多くの県民に伝わり、関わってもらえる計画とするため、メッセージを骨子とは別の形で伝えていく必要がある。
- 「自ら考え、主体的に行動する力」を探究学習を通して育成していくとすると、地域や企業、家族などとの協力が必要であるが、どのように連携していくかが課題。
東北公益文科大学の学生が小中学校で授業をする取組みを行っているが、教頭が様々な調整をしている。実際に大きな事業に体系的に取り組む際は、支援する仕組みが必要だと実感している。
- 社会の中で学校を囲んでいき、子どもたちに勉強だけでなく様々なことを伝えていければ、異なる立場や考え、価値観を持った人たちも、目指すべき社会であるウェルビーイングを認識できるようになるのではないか。
- 新たな取組みも大切だが、これまで行ってきた基本的な取組みについても伝えていく

ことが重要。

- 方針2のアクション4について、特別支援教育の推進や困難を抱える子どもへの対応、家庭の事情による子どもへの対応について書かれているが、これは個性という言葉で捉えることができるのか。

【末永委員】

- 計画自体は概念的、コンセプチュアルなものになって然るべきだが、言葉を伝えることの難しさを感じるどころ。ウェルビーイングについても、我々委員は具体性をもって捉えられるが、これまでの7教振策定の議論の流れを見ていない現場の教員には伝わらない可能性がある。バックグラウンドによって言葉の捉え方は全く異なることが多い。全てを定義することは難しいが、特に大事な言葉については、ある程度の解説を示してあげた方が丁寧。
- 今回の骨子案だけを見ると、山形県のものか他県のものかわからない。これまでの検討委員会における矢野委員の解説や藤川委員の事例、広井良典氏のお話し、また、県内の個別具体の事例などがアペンディックス(参考資料、補足資料)として入ってくると、それが山形の教育振興計画の個性になり、見ごたえ、質感のあるものになるだろう。
- 計画は、いかに現場レベルまで落とせるかが肝要。それぞれの項目について主語を明確化するところまで踏み込めないものか。主語がないと誰がやるのかが曖昧になる。想定されるステークホルダーが整理され、その人達が何をするということが見えると、現場への落としやすさが増す。
- 成果を定量的、定性的に評価できるものが必要であり、それを誰がやるかが見えると、アクションプラン、現場レベルに落とせる。

【高井委員】

- 企業の事業計画の場合、目的、方針、目標という流れになるため、目標の下に方針が置かれていることはやや見慣れない感がある。
- 目標の「多様性あふれる」という点について、教育が終わるまでは、個性を尊重される立場でいいのかもしれないが、社会に出たときには一人ひとりの多様性を認め合うということが必要。
アクション3には「互いを尊重し」という形で入っているが、アクション5～7では表現しきれていない。
アクション4については、実際に子どもの近くで対応する人の対応の仕方が非常に重要。個性を尊重するのはいいが、それに隷属する形になってはならない。
- 今回の方針は子どもたちにとって充実した中身だと思うが、目標にある「人づくり」にリンクするかという点で見ると弱い。
- 子ども達へのメッセージの中にある「地域や社会いろいろな人と交流をする」について、つながる仕組みはとても重要だが、地域や社会という言葉の主体が非常に曖昧なので、地域や社会とは誰のことなのかを具体化させる必要がある。
一例ではあるが、工業県としての特色を生かすならば、高校と大学が一貫となった高専のような学校があってもよいのではないか。全国の高専の研究を見ると、様々な企業

とのつながりがあり、地元就職するケースも多い。地域と教育がつながる姿を今後の計画策定の中で具体化していくことが大切。

- 教育関係者へのメッセージは必要ではないか。
- インセンティブが必要。現行の内容は、やるべきことリストになってしまっている。計画を自分事として捉えてもらうためには、したくなる理由、やらなければならない理由をメッセージに入れることが必要。

【玉井委員】

- アクション2③のグローバル化について。外国語教育の充実という部分で、英語以外にも力を入れていただきたい。
- 韓国や台湾などの比較的日本から近距離にある国・地域のみならず、海外での体験学習、海外との交流を果敢に進めていくことも非常に大切。
- 加えた方がよい点が2点。1つは、「多文化共生」を言う言葉をどこかに入れた方がよいということ。出生数が減少傾向にある中では、否応なく多文化共生せざるを得なくなるので、山形の将来を担う子供たちは、多文化共生を自然体で学ぶ必要がある。
- 2点目は、産官学という言葉があるが、産官学学（学＝高校、学＝大学）のように、地域の大学をもっと生かす形にしてもらいたい。地域との関係を密にし、より活力あふれる学校づくりを目指して、互いにウィンウィンな関係が築けるとよい。

【寺脇委員】

- 骨子案の構成に関して2点。1つ目は、わかりやすさについて。本県教育を取り巻く社会的な経済状況（＝外部要因）、6教振計画期間の現状（＝内部要因）から課題が見えてきて、その課題から目標が導かれたことがフローチャートのように縦に流れていると大変見やすい。現行の横書きフォーマットでは、委員ではない一般の方や背景を知らない地域社会の皆さんにはわかりづらいだろう。
- 2つ目は、山形県の計画としての個性について。「県民の皆様へ」の部分が、山形県の計画としての個性だと思うが、最後まで走り切れていない印象。ソフトウェア開発においては、システムを使うアクターをきちんと定義しないと、いらない機能が開発されたり、使えないソフトウェアが出来上がる。この骨子案は、子どもたち、保護者、家庭の皆様、地域の皆様と、しっかりとアクターが定義されていて、皆さん7教振を自分事として捉えて見てくださいね、と個性が出つつあるが、方針やアクションに対応しきれていない。多様性や個性を意識している熱意はとても感じるが完走するための工夫がもう少し必要。
- 7教振に盛り込むべき点について。方針Ⅲアクション6の教育DXに関して。多様性や主体的な学びをもっと充実させるために教育DXの推進、つまりデジタル人材の育成や教育データの分析を重要なキーポイントとして挙げているが、方針Ⅲのタイトル「社会の変化に対応した学びの環境を整える」に多様性や主体的な学びを意識したキーワードが入っていない。文科省でも、主体的な学びをするためには対話的であることが重要だと言っているので、主体的で対話的な学び、これによって深い学びを実現していくという点をタイトルにも盛り込んでもらいたい。

- これまでの検討委員会等で申し上げた、エビデンス・ベースト・ポリシー・メイキング（証拠に基づく政策立案）が意識されていたり、教育データ、学習データだけではなく、態度などを分析し多様性や個別の学びを支援するといったことが盛り込まれた点に感謝する。
- 山形式のウェルビーイングをこの1枚に表現した方が県民の皆さんに響くのではないかと。何をどこに向かっていけばいいのか、どんなふうに少し背伸びすればいいのかを訴えられるとよいだろう。

【内藤委員】

- コロナによって3年程度で世の中がひっくり返る経験をした。10年の計画について時間をかけて議論し、完璧だと出したとしても、来年何が起こるかわからない。計画期間の長さを考えると、将来の変化に対応するためには、粗さや柔軟性が必要。
- 自分事にしてほしいという今回のメッセージはとても良い。現場の先生方や世の中の皆さんに自分事にしてもらうには、刺激や動機という本来の意味でのインセンティブが必要。自分にとってどんな影響があるのか、自分の家族、子ども、仲間がもっと良くなると思えば、だったらやりましょうという人が増えてくるだろう。
- 人口減少の中で若者の地元離れ、人口流出が進んでいる。ある高校の先生から、多くの高校生は地元の魅力を感じておらず、早く出たいと思っているというショッキングな話を聞いた。その理由を聞いてみると、親の意識が子どもに影響を与えてしまっているということである。我々大人がもっと山形を好きになって、山形で働くことの良さを子どもたちに伝えていく必要がある。

【中西委員】

- ウェルビーイングという言葉自体、どこまで社会に浸透しているのか曖昧だったり、5年も経てば陳腐な言葉になってしまうのではないかと懸念も感じるが、政府の教育振興基本計画において掲げている以上は、骨子に入れるのは良いと思う。概念は10年持続出来るような柔軟な捉えが出来る内容だと良いのではないかと。
- 県民の皆様へというメッセージは非常に良い。教育の枠を出て、企業や社会を見ると全く異なる方向にあるということになってはならない。子ども達だけではなく、保護者、家庭、地域、企業全てに、これから山形が目指す教育の姿を知ってもらいたい。次の山形を担う人材を育成するんだということを認識してもらい、そのためには企業、地域、家庭も協力して、共に次の山形を担う人づくりをしていくという考えの下で子ども達を見守ってもらいたい必要がある。
- 日本以外の出身者が増えているが、子ども達にとっては、身近に日本と異なる文化の人がいるというのは非常に良い機会。山形の次世代を担う子ども達には、多文化共生を幅広く捉えてもらいたい。併せて、そうした方々の学びの機会の確保や受け入れについても考える必要がある。
- 自分事として捉えてもらうにはインセンティブが必要という話だが、大人である私たちにとっては将来一緒に働くメンバーや、山形の人口を支えてくれるメンバーを育てるのだということが最終的なインセンティブではないか。子ども達にも大人はそう考えて

いるんだと伝えることが大切。

【藤川委員】

- 骨子はこれでいいので、これをどう打ち出していくのかを議論したい。ここからが我々委員の腕の見せ所。
- 6教振がまとめてあるサイトを見ると、これを誰が読むのかと思う。県民から教育に主体的に関わってもらうには、内容に不完全さとシンプルさが大事。「県民に意識してほしいこと、毎日心がけてほしい振る舞い」のようにシンプルなものがよい。例えば、山形県の10年後の素敵なミライを実現するために、オトナも子どもも大切にしてほしいこと4つ、「人生をオモシロがろう！！」「『そもそもなんで？』を大切にしよう！」「応援しよう！」「笑顔であらう！」などはどうか。この4つは、これまでの検討委員会での議論や今までの自身の教育の取組みが集約できると感じている。
- さらに気になる人は、今回の骨子のような計画の概要を、さらに具体の施策に進みなければ6教振のような内容に進んでもらえばよい。ここで一生懸命作った内容も、時代の移り変わりが早い中、持って数年だろう。不完全であるほど、県民の皆さんから「具体的にこうした方がよいのでは？」という考えが宿るだろうし、それが地域のオリジナリティが出るきっかけにもなると思う。

【三浦委員長】

- 骨子案の上段と下段にスムーズさがない。上段では新規性を出そうとしているのに、下段ではこれまでの教育振興計画の構成をそのまま持ってきている点に違和感がある。ただ、今後10年間の教育施策の主要部分を押さえる必要があるので下段をなくすことはできないし、上段だけでは教育振興計画としての役割は果たさない。
- 無理に一枚に全てをまとめ切らなくともよい。これだけはやってほしいことについて、県民の皆さんも理解いただけるシンプルなものを作り、さらに理解を進めたい人はその先を見る、もっと進みたい人は具体的な取組みに進んでいくというように、インターネット社会の中でそれぞれがやっているようなやり方を7教振では盛り込めればよい。
- 7教振で何を中核に置くのかをもっと打ち出す部分があってもよい。というのは、学校関係者の中では、6教振の柱の1つが探究型学習であるという理解は得られているが、6教振を読み返すとそのメッセージ性は弱い。つまり、学校の先生達はわかっているが、県民の皆さんには伝わっていないということ。7教振では6教振から進化した計画を作っていきたい。

【村山委員】

- 目標、県民の皆さんへのメッセージは、分かりやすさにこだわっていかなければならない。
- 「目指す社会」における“地域等は、子ども一人ひとりの違いや個性を評価するとともに～”の部分について、子どもや保護者は評価に疲れて社会から離れているケースが多い。そのため、“評価”といった言葉は使わず、“認め合う”や“支え合う”、“肯定する”といった言葉にすべき。

- 「保護者、家庭の皆様へ」における“子どもが自分で遊び育つ力を信じ〜”の部分について、遊びイコール幼児期というイメージが強いため、「遊び」という言葉はアクション3の「幼児教育の推進」の中でエッセンスを入れながら、「幼児教育の充実」とすべき。また、“しっかり見守り”という言葉が強すぎて、監視として受け取られかねないので、“子どもは自分のペースで自ら育つ力があり、遠くから見守りながら困った時には手を差し伸べる”としてはどうか。
- アクション8の家庭や地域と一体となって支える部分について、学童保育所や子ども食堂といった、色々な経験・体験を積み重ねて子供の育ちを豊かにしてくれる環境についても触れていくべき。

【矢野委員】

- ウェルビーイングという言葉を目標に入れたことは、大変力強く感じた。自分の力を活かしているか、その力を活かして背伸びしているかという二軸で右上を目指すことで、多様性を尊重していくというメッセージがしっかりと出ている。
- 方針3、アクション8、細目19の各項目がうまくいっているかは、子ども、保護者、地域それぞれの方が自分の力を大いに生かして背伸びしたことに取り組んでいるか、程よい挑戦をしているかといった観点からふれずに確認していく必要。
- アクション6の背伸びが足りない。現在、世界中でどんな話題であっても最大のテーマは生成AI。今後10年を見通すときには、アクション6で明確に示すべき。

【山川教育委員】

- メッセージの対象を子どもに限らず保護者、地域等まで広げるのであれば、わかりやすい言葉、説明が必要。
- 子どもたちが教育の場で一番教育を受けるのは学校であり、学校の中で一番教育の責任を負っているのは教職員の方々であるため、この計画の中身は教員を目指している方々を含めきちんと認識していただく必要。
- 予測困難な時代の中、人口減少、生徒数の減少は確実に予測できる。十数年後には二割ぐらい人口が減ると言われている中で、今のままでいいわけがなく対応できるような形を検討しておかなければならない。

【小関教育委員】

- この計画を県民に伝える場合には色々と工夫が必要。本を読むにしても、文字がびっしり書いてある本よりも空白がある本の方が読まれやすい。行間がわざと空いていたり、絵を多く取り入れたりといったデザインの工夫が必要。

【丹治教育委員】

- 今後十年、本当に変わっていかねばならないときに来ているんだなと感じた。骨子案に載っている取組みがどうやったらできるかということを考えていかねばならない。
- 手段が目的にならないように、この計画が迷ったときにどうしたらいいかなと感じた

ら立ち返ることができるもの、もう一度目標目的を再確認できて自分たちがやるべきことを確認できるものであったらよい